

スゴイ農業、スゴイJA

JA自己改革の現場から

Iターン農業者とともに産地を作る

——JAそお鹿児島ピーマン専門部会の取り組み

和泉真理（一般社団法人JC総研客員研究員）

鹿児島県 IPM の PR キャラクター
「チーム・マモット」を包装に入れたピーマン

農業についての知識も地縁も持たないIターン農業者を受け入れ、彼らが産地を支えるまで育てることはなかなか容易ではありません。約20年にわたる就農希望者の受け入れと産地振興の取り組みをたどります。



今では部会員の約7割を Iターン農業者が占める産地に

担い手の高齢化により生産者数や産地規模が縮小していくのに対し、外部からの人材、いわゆるIターン農業者によって産地を再生できないだろうかと考えているJAや生産部会はいくつもある。国の青年就農給付金（平成29年度からは農業次世代人材投資資金）はIターン就農の資金面でのハードルを下げ、価値観の多様化の中で都市の若者が農業を職業選択の1つと考えることも増えており、Iターン就農をめぐる環境は改善されている。しかし農業についての知識も地縁も持たないIターン農業者を受け入れ、彼らが産地を支えるまで育てることは容易ではない。

JAそお鹿児島ピーマン専門部会はIターン農業者を20年前から、当時は珍しかった農業公社^{ほじょう}で資金をサポートしながら研修させる方法で受け入れ、就農・定着への支援を行ってきた。今では部会員の約7割をIターン農業者が占めている。Iターン農業者の増加とともに、部会員数も出荷額も伸びており、部会員の平均年齢も約48歳と若い。若

いずみ・まり

1960年、東京都生まれ。東北大学農学部卒業。英国オックスフォード大学修士課程修了。農林水産省勤務を経て現職。主な著書に『英国の農業環境政策』（富民協会、1989年）、『農業の新人革命』（農山漁村文化協会、2012年）、『ダイナミックに展開するヨーロッパの農業協同組合』（筑波書房、2015年）。

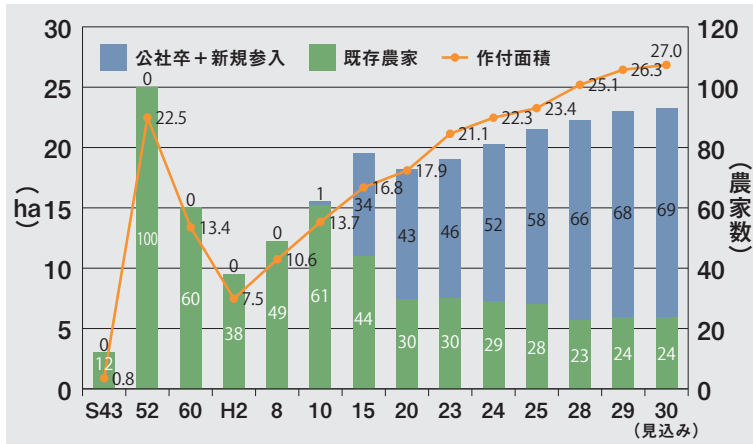
い部会員たちは、IPM（天敵などを用いた総合的病虫害雑草防除管理）など新技術の導入、K-GAP（かごしまの農林水産物認証制度）への取り組みなど、どんどん取り込んできた。部会は新規就農支援やこれらの取り組みにより、平成26年度の日本農業賞「集団組織の部」の大賞を受賞している。JAそお鹿児島ピーマン専門部会とそれを支えるJAそお鹿児島の取り組みを紹介しよう。

JAそお鹿児島のピーマン産地は、昭和43年に志布志^{しぶし}町で12名でピーマン栽培を始めたことに遡る。産地は昭和52年には生産者100名、栽培面積22.5haまで拡大したが、第二次オイルショック以降、面積も生産者も減少し、指定産地を維持できない危機に直面した。それに対し、平成8年に当時の志布志^{さかのぼ}町とJAそお鹿児島で財志布志町農業公社を設立し、研修用のハウスを設け、Iターン農業

図1 JAそお鹿児島ピーマン専門部会の歩み



ピーマン専門部会の部会長の今吉さん夫妻



者を育てることを始めた。事業開始後10年間は研修生の定着率も低かったが、この10年ほどは就農後にやめる人はほとんど出ていない。平成18年を境に、既存農家とIターン農業者の栽培面積や農家数が逆転した。就農時から約30aのハウスで農業所得400万円程度が確保できる、Iターン農業者がすでに数多く定着している、夏は作業がないので、子供と夏休みを過ごしたり、地元の志布志やすぐ隣の宮崎の海岸でサーフィンを楽しめることなどが、Iターン希望者を惹きつけている。

現在のピーマン専門部会の部会長の今吉健太郎さん（50歳）もIターン農業者だ。今吉さん夫婦は二人とも大阪出身であり、インタビューしている最中に大阪弁での掛け合いがポンポンと飛び出す。

今吉さんが公社で研修を始めたのは平成11年7月、31歳の時だった。農業公社研修事業の4期生である。もともとサーフィンが好きで、サーフィンをするために農村を訪れ、農業に関心を持っていた。職探しに大阪でのニューファーマーズ・フェアに出向いたところ、そこに都道府県以外で唯一町としてブースを出していたのが志布志町だった。役場の農政課の人から説明を受け、1週間の体験研修を経て、研修生となった。来てみたら支援が手厚く、営農指導員がつきっきりで教えてくれた。離農した農業公社卒業生のハウスを

引き継いで就農し、現在24.8aの面積でピーマンを栽培している。就農した年はピーマンの価格が良く運が良かったと今吉さんは笑うが、まだIターン農業者の珍しい時期で、地元への溶け込みなど色々と苦労したようだ。しかし、「ピーマンをやって良かった」と、今ではピーマン作りに熱中し、サーフィンにはあまり行かなくなったそうだ。

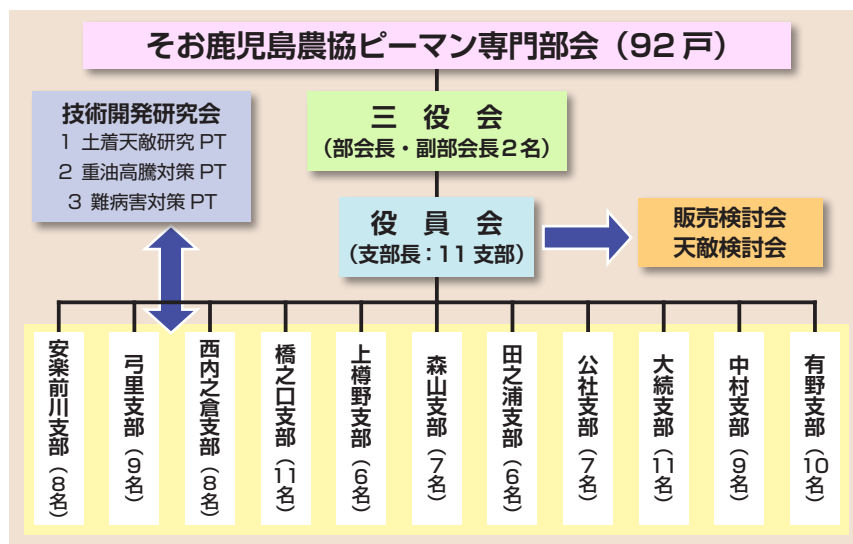
今吉さんから見ると、以前は夢ばかりが先行している人も多かったが、最近の人は真面目でやる気があるなど、Iターン農業者の気質も変わってきたと感じている。近年はIターン農業者の就農・定着までの階段がすでに用意されている上、Iターン者が多く互いの苦労が分かり合えるなど、就農しやすくなっていると言う。

役員経験者を増やし よりまとまりのある産地に

今吉さんは29年度の部会長であり、役員は4年目である。部会長はこのところIターン農業者が続いている。既存農家はベテラン農家であり、すでに役員を経験している。

ピーマン専門部会は、三役の下に11支部で構成されている。この他、IPMなどに取り組む技術開発研究会が横断的に設置されている。ピーマン専門部会の支部は組合員のピーマンのハウスのある場所ごとに構成され、交流会

図2 JAそお鹿児島ピーマン専門部会の組織図



「頼られる存在であることが大切」と日々奔走するJA職員の東別府さん

など活発な支部活動がIターン農業者の地域への溶け込みをスムーズにしている。また、部会では役員会による運営がきちんとなされている。役員会は2か月ごとに開催され、部会長、副部会長2人、11支部の支部長、それに営農指導員、選果場、公社、必要に応じて普及指導員や市役所が参加する。ここで決まったことは、支部を通じて各組合員に徹底される(図2)。

以前は部会の役員は副部会長4年、部会長2年の計6年間務めたが、長すぎると2+1年の3年にした。Iターン農業者は、役員になることで地域や産地の仕組みなどについて分かるようになる。役員が次々交代することで経験者が増え、皆で自分たちの産地を守る仕組みを考えていくようになる。今吉さん自身も「役員になる前は、自分のことしか考えなかった」。そういう今吉さんの部会長としての心構えは、「92人いる部会が1つにまとまっているようにすること」だ。

Iターン就農者は高学歴でIT産業経験者なども多く、新しい技術や管理手法の導入にも前向きだ。例えば、天敵を利用して病害虫を抑えるIPMへの取り組みは、Iターン農業者により土着天敵の活用が3年間でスムーズに産地に導入され、自分たちの生活を守るために

必要な技術として今や当たり前になっている。ピーマンのハウスの中には天敵を惹きつけるクレオメが植えられている。10年前はスリップスが害虫として最大の課題だったが、天敵の活用でそれがなくなり、秀品率も向上してきた。鹿児島県のIPMのPRキャラクターである「チーム・マモット」の使用権を取り(県第1号)、ピーマンの包装にはそれが使われている。

また、平成20年には、K-GAPを取得した。これについて、今吉さんは、K-GAPのための記帳は面倒ではあるが、栽培管理が見える化し、ふり返りが容易になった、と言う。

毎年農業の知識も地縁もない組合員が新たに加入し、役員は毎年変わり、時には部会員が暴走気味にもなるピーマン専門部会をJAそお鹿児島はしっかり支えている。前線に立つのは、ピーマン担当の営農指導員3人である。今でこそ、研修から就農、定着までのルートは安定し、Iターン農業者はここ10年ほど誰もやめていない。しかし初期を支えていた先輩たちは大変だったろう、とピーマンを担当して10年になる東別府さんは思いやる。Iターン農業者はピーマン作りでしか生活する術がない。JAは彼らがピーマン作りで食べていけるようにしなくてはならない。営

農面の指導のみならず、地域への溶け込み、既存農家との調整などのため、営農指導員は奔走する。例えば、Iターン農業者には部会の研修とは別に年4回研修会を開催する。Iターン農業者に対する指導のやり方として、結果ばかりを指導するのではなく、その結果に至る過程も丁寧に説明するようにしている。既存の農家の持つ長年の経験に支えられた技術をどのように理論的に伝えるか、技術をどのようにマニュアル化していくか、JA、ピーマン専門部会、農業公社、志布志市、曾於畑地かんがい農業推進センター（普及）と連携しつつサポートしている。

また、女性部会員への研修も重要だ。夫たちは選果場で毎日顔を合わすが、女性はそうではないので、交流の機会を作ることが必要である。市場視察や、スーパーでの試食への参画なども含めて、機会を提供する。

新しい栽培・経営管理技術の導入については、JAは取り組むきっかけを提供し、あとは組合員が考え・取り組むような立ち位置を取る。例えば、JAは毎年1回農家が持って来る土壌サンプルを分析し、肥料設計のカウンセリングをしている。これを踏まえて農業者は適正な施肥を行うようになり、適正なpHにある土壌の割合は格段に向上した。

Iターン農業者から東別府さんには、地元の人なら知っているようなことも含めて様々な相談が持ちかけられる。「頼られる存在であることが大切だから」と日々奔走している。

このようなピーマン専門部会の様子に、これまでいなかった既存農家の後継者がポツポツ戻ってくるようになってきたのは、嬉しい兆しだ。また、管内で他の作目からのピーマンへの転換も進めている。しかし全体としては既存農家、そしてIターン農業者ともに後継者がいない中、今後産地をどうさらに発展させるかが課題である。

さらなるIターン就農者の受け入れに向けて

昨年11月に(公財)志布志市農業公社は新しい研修圃場である松山黒石農場を完成させた。これまでの農場の研修用ハウス10棟に、新たに12棟の研修用ハウスが加わったことになる。研修生1組がハウス2棟を使うので、6組多い研修生を受け入れられる体制となった。

(公財)志布志市農業公社の現在の研修システムは、1年目は研修生1人に月15万円（夫婦であれば2人で25万円）の手当を支給しつつ研修させ、2年目は農業公社のハウスを使って自分で経営するようにしている。研修

共済と協同組合の研究と実務 月刊誌 共済と保険

共済の実務に関する知識、共済・協同組合に関する研究成果、共済・保険業界の動向など、共済・協同組合に携わる皆さんに役立つ最新の情報を毎月お届けしています。

年間定期購読料 9,600 円（送料・税込）

編集・発行 一般社団法人 日本共済協会

〒160-0008 東京都新宿区三栄町23-1 ライラック三栄ビル1F

電話 03-5368-5755 <http://www.jcia.or.jp/>



生としての条件は、ピーマンは1人ではできないので、基本的にパートナーがいることと、500万円程度の資金を準備することである。500万円は、ピーマンが取れない場合の生活費や、4～5月に就農してから10月にピーマンの収穫が始まるまでのつなぎ資金となる。年齢は、概ね45歳未満となっている。

就農希望者には体験研修に来てもらい、そこで公社、市役所、JA、普及センターも参加して面談を行う。研修生として受け入れる判断ポイントはやる気、夫婦の理解だそうで、特に「奥さんの壁」が大きいそうだ。

この新しい松山黒石農場のハウスで研修中の若水洋さん（39歳）は研修2年目、来年は就農予定である。実は若水さんの父親も公社卒業7期生のIターン農業者である。ただし、父親が就農した時、若水さんはすでに他出しており、若水さんに農業経験は無い。東京でサラリーマンをしており、当初は農業に興味はなかったが、30代半ばになり、子供を田舎で育てたいとも思った。父親のピーマン経営が軌道に乗っているのを見て、元気なうちに仕事を覚えたいと就農を決めた。子供がまだ小さいので、研修は若水さん1人で行い、妻や妻の母が手伝いに来ている。サラリーマン時代は仕事が忙しく夜遅かったが、今は子供と触れ合う時間が持てるようになった。

若水さんは来年の就農時には父親のハウス



研修中の若水さん

の一部と公社の空いているハウスを借りて就農するつもりである。父親は60aのハウスを経営しており、規模重視の管理法だが、若水さんは反収重視の生産を行い、CO₂利用や湿度管理など、新しい栽培技術も取り入れていると考えている。ピーマン専門部会の中には、就農2～3年目で部会の中で上位の単収を上げている農業者もいるそうだ。

現在の志布志市農業公社での研修生は、若水さんを含めた2年目の研修生が4人おり、うち3人はピーマン農家ではない地元出身者である。また、1年生は東京、大阪から1人ずつを含めた3名となっている。志布志市農業公社は、研修圃場を新設したこともあり、できれば毎年5～6組のIターン就農希望者を受け入れたいと考えている。そのため、新しい研修圃場を紹介する動画を配信するなど、PRに力をいれているところだ。

20年の積み重ねが成果に

JAそお鹿児島は、ピーマン専門部会への新規就農者も含めて、長年独自の次世代農業者の育成に取り組んできた。平成9年から始めた農業後継者育成対策事業において、正組合員1戸あたり200円を拠出し、青壮年部活動や就農祝い金などに支出している。これまで総額4,200万円の資金を使い820件を対象としてきた。

管内は、肉牛、畑作物、ピーマンなどの野菜など多様な作物の産地である中、それぞれの作目で次世代の担い手の確保状況は異なる。JAそお鹿児島の本倉敬一代表理事組合長は、JAの中で販売額の高い肉牛の生産に力をいれてきたが、肉牛部門は畜産農家が減少し、牛の頭数も減少に転じる中、後継者対策が喫緊の課題だ。肉牛経営は膨大な初期投資が必要で外部からの新規就農者が一から始めるの

は難しく、経営継承による次世代の育成の手法を模索中だ。

また、管内には、ピーマンの研修圃場である志布志市農業公社、スプレー菊の研修圃場である鹿屋市（旧・輝北町）農業公社があるが、さらに別の公社を立ち上げる準備を行っているところだ。志布志のピーマン専門部会で新規就農者が根付き、集落ともよく溶け込んでいる中、管内の他の地区でも公社設立に向けた検討がされている。本倉組合長は、公社を通じて人を育てるとともに、将来の気象変動にも対応する新しい作目の導入も考えていきたいと期待している。

JAそお鹿児島が担い手のターゲットとするのは、新規就農者だけではない。管内の大崎町周辺の畑作地域は大型法人が育っており、JAは「自分たちから積極的にアプローチしなければ、JAは置いていかれるだけ」と積極的に働きかけ、今では「にじの会」という法人経営の部会がJAの中に作られるまでになった。JAを経由して売れば間違いなく売り上げが得られると、にじの会の会員数は増加しつつある。

本倉敬一組合長は、「農家がJAでないとダメだというJAにならないといけない」と、農家とJAとの接点をさらに増やそうと考えてい



「にじの会」の取り組みなど「JAが頑張れば、農家も考えてJAに来る」と熱い思いを語る本倉組合長

る。そのために、ふれあい訪問（第2土曜日にJA職員が正組合員、准組合員を訪問し、意見を聞く）、年2回のふれあい感謝祭、学校や住民を交えたふれあい勉強会に取り組んでいる。そこで出された意見・要望は企画会に出してすぐに対応する。

次世代の担い手確保はどのJA、どの産地においても喫緊の課題であろう。JAそお鹿児島及びピーマン専門部会の取り組みは、JAがIターン農業者の育成を20年にわたり積み上げたことが、今の成果になっているのだ。しかし、1つのJA管内であっても地域・作目によって様々な選択肢がある。現場の実態に即した方法を模索し、年月をかけて育てていくしかないことを、JAそお鹿児島の取り組みは教えている。

農業・地域・JAを担うリーダーの雑誌



5月号 定価 606円(税込)

JAグループ 家の光協会
〒162-8448 東京都新宿区市谷船河原町11
TEL:03-3266-9002 FAX:03-3266-9047
<http://www.ienohikari.net>

特集 点検！「農協改革集中推進期間」とJA自己改革

政府の「規制改革実施計画」に定められた農協改革集中推進期間が、残り1年を迎えます。これまでの経緯とスケジュールを改めて確認し、政府はJAグループになにを求めているのか、JAの自己改革はどれほど成果を上げているのかを点検。今後の課題と論点を整理します。

「経営学」 初歩の初歩

「コストとはなにか」「減価償却とはなにか」など、経営をするうえで押さえておかなければいけない知識を、基礎レベルでわかりやすく解説。JA青年組織の学習活動などのテキストとしても役立つよう構成します。

(タイトル、内容は変更することがあります)